

2008年度 事業報告

村落植林活動

表1 【小規模苗畑グループ活動実績】

単位：本

州	グループ名	植林 (ha)	販売	配布	枯死	育苗中	合計※	備考
K	TEACA	3,654 (2.28)	1,175	986	160	6,325	4,705	
	Olimo	546 (0.34)	759	1,207	170	1,286	2,430	小学校苗畑
	Fumvuhu	1,617 (1.01)	1,040	0	0	1,573	3,522	小学校苗畑
	Kidia	2,731 (1.71)	1,729	63	16	746	4,167	女性グループ
	Foyeni	350 (0.22)	1,470	893	536	1,328	2,288	女性グループ
	Kiranga	302 (0.19)	40	121	258	163	519	女性グループ
	Magereza	13,648 (2.70)	20,825	15,404	1,407	49,293	47,882	
	Sambarai	475 (0.30)	5,395	544	10	834	6,276	
	Msufini	0 (0.00)	0	0	0	0	0	Riata小に移管
A	Meru	2,011 (1.26)	1,042	1,371	1,517	2,736	7,130	4グループ合計
D	DSM	0 (0)	10,295	0	1,299	7,276	17,008	販売苗木は植林
合計		25,334 (10.01)	43,833	20,589	5,373	71,560	95,927	

「州」：K=キリマンジャロ州、A=アルーシャ州、D=ダルエスサラーム州

※合計数は、前年度の苗木残数を差し引いた当年度の実育苗数

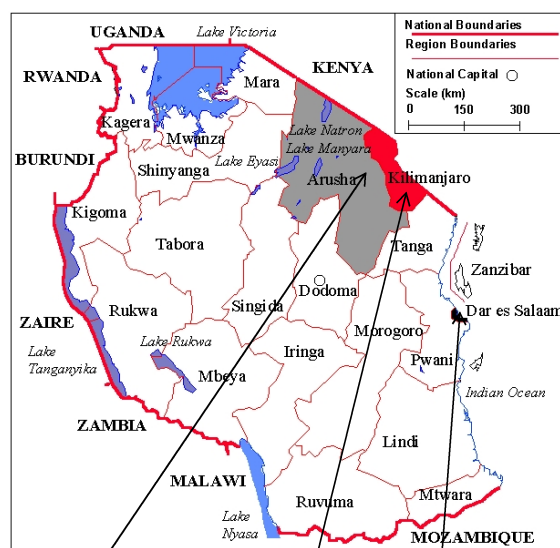
1. 苗畑グループ支援

タンザニアの3州（キリマンジャロ州／アルーシャ州／ダルエスサラーム州、図1）において、カウンターパートのTEACA（Tanzania Environmental Action Association）とともに、計11カ所の苗畑グループ（表1）に対する植林協力を実施した。

前年度からの繰越苗木を除く、2008年度の実質育苗総数は約9万5千本で、そのうち約2万5千本が、各村落において村人たちの植林活動によって植えられた。また約2万1千本が地域住民に対して配布され、約4万4千本が学校・教会・個人などに販売された。

また苗畑グループのうち、キリマンジャロ州ヒモ近郊の半乾燥地にあるMsufini苗畑については、Riata小学校に活動をシフトした。これは植林に限らず、改良カマドや野菜省水農法の地域への普及効果を考えた場合、Msufini苗畑担当で同校の教師でもあるムギニさんが、普段から管理可能な同校に、活動をシフトした方がメリットが大きいと判断したため。

図1 【植林を実施している3州位置図】



アルーシャ州

キリマンジャロ州

ダルエスサラーム州

2. 植林の成果

2008年度は当初計画通り、通常の村落植林に加え、以下の植林活動に重点的に取り組んだ。
(各植林活動別の植林実績は「表2」参照)。

●キリマンジャロ州

キリマンジャロ山南山麓：

- (1) キディア村オールドモシ地区における「土地利用者植林」
- (2) テマ村の森林保護区（ハーフ・マイル・ストリップ）における「水源地植林」

東南山麓：

- (3) マヌ村ブンジョー地区ロレヒルにおける「荒廃尾根植林」

キリマンジャロ山麓の植林では、原生林の復元を目指して、森林伐減少が進む以前の自生優占種 *Ocotea Usambarensis*（クスノキ科）の育苗を試みたが、森林局を含む関連機関においても種子調達ができず、育苗できなかった。



ブンジョー地区マヌ村で発生している土壌浸食

●アルーシャ州（アルメル県メル山麓）：

- (1) 地元のウリショ小学校と協力して、学校周辺の緑化活動
- (2) ムボレレ苗畑グループによるソングロ丘での森林回復植林

●ダルエスサラーム州：

- (1) 受託植林事業であるマブウェパンデ植林地でチークを主力とした植林を継続実施。
- (2) ダルエスサラーム苗畑をベースとした新規植林事業地として、2008年度中に事業実施是非の判断を行うとしていたブワニ州バガモヨのマクルング植林地における受託植林事業は、総事業面積が2,500 ha を超え、現地事業全体に過大な負荷を与えるとの判断から、事業採択を見送った。

表2【2008年度 事業別植林実績】

州	植林活動	植林本数
K	土地利用者植林	4,348
	水源地植林	3,104
	荒廃尾根植林	550
	村落植林、半乾燥地計	15,321
A	ウリショ小学校緑化活動	1,087
	ソングロ丘植林	618
	村落植林	306
D	マブウェパンデ植林	10,295

「州」：K=キリマンジャロ州、A=アルーシャ州、
D=ダルエスサラーム州

上記の各植林活動とも、毎年新規地での植林のみに取り組んでいるわけではなく、3～5年は補植を繰り返し、確実に活着率の向上を図り緑を取り戻すようにしている（最終的な活着率が80%以上となるように取り組んでいる）。

ほとんどの植林地は森林が失われた後、土壌が流出するかブッシュが繁茂した荒廃地であり、初年度の植林による活着率は通常60%かそれ以下である。

表2に掲げるそれぞれの植林地でも、補植の繰り返しにより、ようやく苗木の活着率向上を実感できるようになってきている。キリマンジャロ山麓の水源地植林では、2005年の植林地における活着率は、1年後の2006年時点で59.1%であったが、2009年時点で68.8%になっており、ほぼ7割近くに上がってきている。時間はかかっても辛抱強く森林の回復に取り組む村人たちの、努力の成果といえるものだ。

3. 齟齬をきたす森林保護政策と住民生活

2008年度はまた、キリマンジャロ山南山麓における森林保護政策（及びその厳格な実施）と、住民の間の齟齬、軋轢が顕著化することともなった。

この問題は、(1) もともとキリマンジャロ山の森林を保護するために設けられたバッファゾーン（緩衝帯）“ハーフマイル・フォレスト・ストリップ”（図2）への、国立公園境界の拡大適用という物理的領域の問題と、(2) 自然保護を最優先とし、人間を敵視する旧来の環境至上主義と排除の論理に則った法と政策、即ち思想・制度両面での問題という、2つの側面を持っている。

現在起きている事象は、この2つに基づいて実施される、地域住民の諸活動（日々の生活に

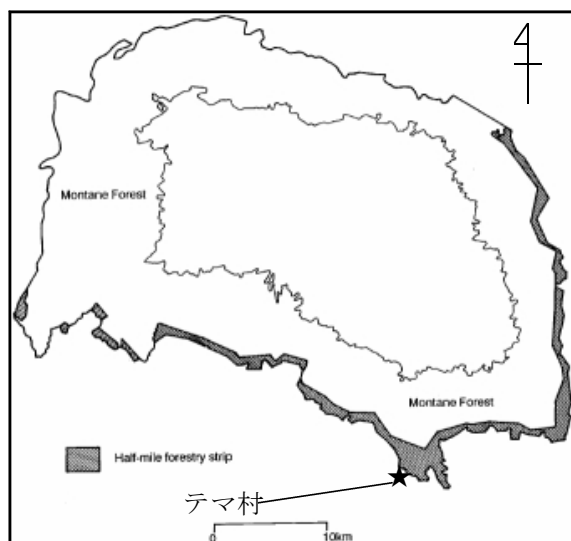


図2【キリマンジャロ山に設定されたハーフ・マイル・フォレストストリップ（图中、斜線部）】

必要な薪炭材採集から、森を守るための植林活動までを含む）のハーフマイル・フォレスト・ストリップからの排除である。

このことは、当然ながら住民生活並びに植林活動に重大な影響を及ぼすこととなった。しかしそれ以上に、「キリマンジャロ山の森を守っているのは一体誰なのか」という村人の自負を、決定的に打ちのめすこととなった。

2008年度は、従来通り住民がハーフマイル・フォレスト・ストリップを利用できるよう、県および州レベルとの交渉を重ね、またキリマンジャロ国立公園を管轄するK I N A P A (Kilimanjaro National Park) と住民を対象としたセミナーを実施するなど、関係の強化を図った。一方、現地新聞を通してキリマンジャロ山の森林保護政策と住民生活との齟齬について訴え、この問題の社会への周知を図った。

こうした動きが奏功し、テマ村においてはこれまで通りハーフマイル・フォレスト・ストリップの利用ができる状態となっている。しかしこれはTEACAやテマ村の村人たちの、これまでの努力に対する「お目こぼし」の範疇でしかない。ましてやこの問題はテマ村だけに限った問題ではなく、キリマンジャロ山南部～東部山麓にかけての広範な地域の村人に影響を及ぼす問題である。

2008年度はこの問題がより精鋭化した1年だったといえる。住民生活、植林活動ともに重大な局面を迎えているというだけでなく、住民こそ森林の保護者、バッファゾーンの役割を果たしてきた筈で、キリマンジャロ山の森林に対する脅威は、むしろ高まっているといえるだろう。

活動の自立

1. グループ積み立て

各グループの自立を目指して、植林に取り組む苗畑グループに対するものとしては、ほかになかなか例を見ないこのグループ積み立てへの取り組み始めてから2年が経過する。

しかし実施対象としている5グループ（学校苗畑は対象としていない）のうち、毎月の積み立てをしっかりと行っているのはKidia女性グループとKiranga女性グループの2苗畑グループに過ぎない。TEACAより再三の指導を行っているが、残りの3グループ（Foyeni女性グループ、Sambarai苗畑グループ、Mbolele苗畑グループ）については、一向に改善の気配が見られない。

この積み立ては、グループすべてのメンバーが毎月千シリングずつ、自分たちのグループの口座に積み立てていくもので、その実施がTEACAの協力継続の前提となっている。各グループは自分たちで会計データをつけ、実際の口座のデータと合わせて、毎月TEACAに提出することが求められている。

また、積み立ての完全実施がされたグループには、ヤギ銀行の仕組みを併用して、優良種の雌ヤギ1頭がグループに支援されることになっている。

しかし3グループから、データが出てこないのが現状である。毎月の積立額の取り決めや、会計データの提出等、グループ積み立てについてはその方法や仕組みについて、2007年度に各グループと何度も協議を重ねながら合意形成を図ってきている。2008年度も何度もTEACAはこれらのグループにその必要性和グループにとってのメリットを説いている。それにも関わらずなぜデータが出てこないのか、TEACAも確たる真相をまだ掴みかねている。

グループ積み立てはこのまま進めるのか、もしくは方法を抜本的に見直す必要があるのか、その岐路にあるといえる。

2. 養蜂

(1) 低地養蜂事業（モシ県Kahe事業地）

Kahe事業地では、2007年度後半にそれまでのバンカータイプ改良養蜂箱からラングストースタイプ改良養蜂箱への全面切り替えを実施し、2008年度は新規に設置されたラングストースタイプ養蜂箱の営巣率向上を目指した。

このため、数量は十分ではないがミツバチの誘引と巣作りを助ける巣礎を日本から供給し、これを各養蜂箱に分割設置した。また、通常は巣枠に設置するワイヤが営巣の妨げになるとの判断から、これを撤去するなどの工夫を行った。

これによりラングストースタイプ養蜂箱でもミツバチが営巣を始め、営巣率は25%となった（その他の営巣中の養蜂箱まで含めると、全体での営巣率は44%）。

しかし2009年に入ってから雨量不足（事業地に一番近い雨量計測地であるモシで、2008年12月～2009年4月の雨量が、例年の30～49%。テマ村で34%）で、ミツバチが一斉に逃亡してしまい、年度末の3月時点で、ラングストースタイプ養蜂箱の営巣1箱（設置12箱）、その他の養蜂箱を含めても、全体での営巣率は19%まで落ちてしまっている。雨量不足はその後も続いており、さらなる営巣率の低下は避けられない状況である。

事業地へは蜜源樹（*Callistemon speciosus*）30本の植林を継続実施した。

また、収穫したハチミツの売上げは6万シリングになり、これまでで最高となった。



ラングストース改良養蜂箱の巣枠に設置された巣礎

(2) 高地養蜂事業（テマ村）

2008年度はハリナシバチ用改良養蜂箱3～5箱の増設を行うこととしていたが、TEACA用に1箱、Kiranga女性グループ用に伝統タイプ養蜂箱2箱、計3箱の新規導入を行った。

Kiranga女性グループはキリマンジャロ山の標高1,000mほどのKorini地区で活動しているが、比較的標高の低い同地では、まだハリナシバチ養蜂が一般的ではない。このためハリナシバチ養蜂の地域展開を図るために導入を決定したもの。改良養蜂箱ではなく伝統養蜂箱としたのは、地元養蜂家から、まず一般的な伝統養蜂

箱でハチを環境に慣らし、その上で改良養蜂箱での普及を図った方が良いとのアドバイスを受けたため。

ハリナシバチは設置養蜂箱全数（14箱）で営巣しており、2008年度のハチミツの売上げは7万7千シリングで、こちらも過去最高の売上げとなった。

3. 穀物貯蔵

貯蔵分はすべて売り切っており、貯蔵在庫は0となっている。新規調達についてはタンザニア全土での急激な物価高騰にともない、リスクが大きいと判断し、見送った。

4. 収入向上のための新規事業

(1) モシに土地を確保

2008年度のTEACAの自己資金比率は22%であった（2007年度は32%。低下の要因は、裁縫教室の設備拡充、半乾燥地での井戸水源調査＝民間調査会社へ委託等を実施したため）。

TEACAの自立のためには、ある程度の資金を安定的にもたらしてくれる収入事業を開拓していく必要がある。このため、2008年度は将来の建物からの家賃収入等を視野に入れ、モシ近郊に約324坪の土地を確保した。

(2) イス貸し出し事業

同様に、2008年度にTEACAの自己資金調達のための新規事業として、イスの貸し出し事業を開始した。これはイス100脚を事務所に保管しておき、村での冠婚葬祭など、多くの人が集まる時に貸し出しをするものである。

2008年度は8万シリングの収入となった。

生活改善

1. 改良カマド普及

2008年度は、小学校への学校用大型改良カマド1基、Kiranga女性グループに3基、Kidia女性グループに10基、計14基を新設した（その他改修1基）。

またカマド設置技術の習熟のため、Kidia村の設置担当者へのOJT形式でのトレーニングを実施した。これにより同村では、TEACAの技術者に頼らず、改良カマドの設置が可能となった。

設置コスト削減のために再試作するとしていた土製カマドは完成したが、現在使用モニター中で、まだ有効性の確認にいたっていない。

2. 野菜省水農法

半乾燥地にあるリアタ小学校で、2007年度より地域普及のためにデモ展示に取り組んでいるが、学校が休みの日に放牧家畜による食害に遭ってしまう問題があった。そこで2008年度は設置場所に柵を設け、食害防止を図った。

野菜の世話は毎日子供たちがしており、2008年にはさっそく緑葉野菜スクマウィキの収穫がされた。しかし2009年に入ってから雨不足が厳しく、前半の収穫は厳しい状況となっている。学校は地域へのデモ展示には有利なロケーションであるが、リアタ小学校は近くでまったく水の確保ができないことがネックとなっている。

3. コーヒー農家支援

「挿し木」による新品種コーヒー苗木栽培については、コーヒー生産農家グループKIWAKABOへの技術移転を終え、順調に栽培が進められている。

これにともない、TEACAでは苗木および親木への「接ぎ木」による新品種の育成に着手した。2008年度は接ぎ木用の台木とするため、これまで中止していた従来品種コーヒー苗木の育苗を再開し、約6千本を育苗。

この苗木を使って、タンザニアコーヒー研究所 (TaCRI) から専門家を招き、村人に対する接ぎ木セミナーを2回実施した。セミナー後に村人への苗木の頒布 (有料) も開始され、約3千本が頒布された。

4. 小学校への牛乳配布

オリモ小学校の全生徒 (300人) に対する牛乳配布 (週2回) を継続実施した。先生からは、牛乳が配布される日は、学校に来る生徒の数が増えるとの報告が入っており、登校率の向上にも繋がっているようである。

5. 診療所支援

ナティロ診療所への薬剤支援を継続実施した。ただし現地調達できる薬剤、資材の一部の品質が悪い問題があり、対応の検討が必要となっている。

また同診療所は2008年に医師が移動となり、新任のマリサ先生は地域でも腕の確かなことで知られた医師である。ナティロ診療所の重要さはますます増したとあって良いが、経営は相変わらず厳しく、看護婦の給料が満足に払えない状況となっている。薬剤、資材の品質とともに、ナティロ診療所には重い課題となっている。

教育支援

1. 小学校への文具支援

従来のキリマンジャロ山麓の3校 (オリモ、フンブフ、フォイエニ小学校) に加え、半乾燥地にあるリアタ小学校、マワンジエニ小学校を合わせた計5校の全校生徒への、文具支援 (ノート、ボールペン、鉛筆) を実施した。

またタンザニアの小学校には音楽、体育、図工といった授業がないため、オリモ小学校において図工の一環として、織物の染色、ろうけつ染めの授業を支援した。

2. 子どもたちのスタディツアー支援

小学校の子どもたちに環境を守ることの大切さを学んでもらい、自分たちの国について理解を深めてもらうことを目的として、2009年度も小学校1校を対象として、スタディツアー (日本の小学校の社会科見学にあたるプログラム) を実施した。

今回は初めてアルーシャ州の小学校 (Urisho小学校) を対象として実施し、5、6年の生徒約100人が参加した。スタディツアーでは半乾燥地、鉱物資源会社、飛行場を訪問し、また半乾燥地にある小学校との交流も行った。



スタディツアーでの半乾燥地の小学校との交流の様子

その他

1. パソコン研修

2008年度もTEACAリーダーに対するパソコン研修を継続実施した。事務所へのパソコン導入も図るとしていたが、財政的に厳しく、2008年度は導入は見送った。

2. NHK「地球エコ大紀行」撮影受け入れ

テマ村のFoyeni事業地にNHKの撮影を受け入れ、衛星で日本に生中継がされた。

2008年度 事業報告 <国内事業>

国内自主活動(菜園・手工芸品活動)

2008年度は、これまでの菜園、手工芸品(カンガバッグ)に加え、新たに絵を通じてタンザニアの子どもたちとの交流を図ることを目的とした「絵本プロジェクト」が活動を始めた。

2月のワークキャンプには同プロジェクトからメンバーが参加し、オリモ小学校の生徒達に、キリマンジャロ山麓で暮らすチャガ民族の、昔の暮らしを題材としたスワヒリ語の絵本“Suya Anaishi Kilimanjaro”の読み聞かせを行った。

2008年度の各活動の取り組み実績は以下の通りであった。

- ・菜園活動： 菜園作業 (10回)
ミーティング (2回)
- ・手工芸品： ミーティング (6回)
ワークショップ (2回)
- ・絵本プロジェクト： ミーティング (6回)
現地活動 (1回)



オリモ小学校での絵本の読み聞かせ

国際協カイベント等

2008年度は以下のイベントに参加し、当会の活動展示、説明を行った。

- ・4月：「桜まつり」
- ・5月：「アフリカンフェスティバル」
- ・10月：「グローバルフェスタ」
- ・10月：「横浜国際協力フェスティバル」
- ・12月：「アフリカ展&フリーマーケット」

講演会・報告会等

「キリマンジャロ山麓でのエコツアー」

リコーテクノシステムズ㈱の「社員参加型活動報告会」にて活動報告を行った。

この報告会では、チャガ民族の伝統的な暮らしと文化、自然との関わりをテーマに、エコツアーリズムとの観点から講演を行った。またその模様が全社に放映された。

メディア掲載等

- ・NHK「地球エコ大紀行」衛星生放送
(’08/9/5-6)
- ・「トレインチャンネル」(首都圏JR、私鉄)
(’08/12/15-21)
- ・Yahoo!テレビ『赤道大紀行』特集募金
(’08/12/31-’09/2/1)

国際交流事業

- ・「キリマンジャロ植林ワークキャンプ」
(’09/2/11-3/6)

広 報

ミニレター「Habari gani?」発行開始

従来「ポレポレクラブNow」として発行していたミニニュースレターを、「Habari gani?」として新装し、毎月発行を開始した。

これは事務局アルバイトの皆さんが独力で装丁、内容をあらためて発行に漕ぎ着けたもので、タンザニアのちょっとした情報や話題をピックアップし、なるべく現地を身近に感じていただけるようにした(タンザニアからは、元事務局アルバイトの石原君が現地レポートを担当)。

また国内活動も、なるべく内向けの報告に終わらないように、コラムを設けるなど、各国内活動チームに工夫をしてもらった。



タンザニア・ポレポレクラブ

(事務所) 〒154-0016 東京都世田谷区弦巻1-28-15サニタイトハイツ301号室

(Tel/Fax) 03-3439-4847、(郵便振込口座) 00150-7-77254

(E-mail) pole2club@hotmail.com、(HP) <http://polepoleclub.ld.infoseek.co.jp/>

(本 部) 〒107-0062 東京都港区南青山6-1-32-103
